

第5回学校運営協議会 記録

1 日 時 令和5年2月16日(水) 15:05~16:15

2 場 所 逗子高等学校 会議室

3 出席者【委員】 関 忠子、吉川 裕美、黒羽 秀昌、島貫 宏、村川 真理子
矢島 明、川島 星美、立川 悦子(敬称略)

【教職員】 佐久間校長、碓井副校長、西海教頭、丸山事務長
下山田総括教諭、万行総括教諭、澤野総括教諭

4 内 容 配付「次第」のとおり(以下、○=教職員、●=外部者)

(1) 校長挨拶

○本日の会の趣旨説明

(2) 今年度の学校評価(最終評価)について

①各グループからの説明

「視点1(教育課程・学習指導)」:学務キャリア支援グループ 下山田総括教諭より

○在校生が3年生しかない状況であり、学習スタイルは既に確立されている。

○新たな取組はなかったが、生徒は各自進路希望に向けて努力をしていた。

○授業改善の取組も充分とは言えなかったが、授業観察を通して振り返りを行なった。

「視点2(生徒指導・支援)」:生徒支援グループ 万行総括教諭より

○日常的な生活指導、生徒会活動の支援について取り組んだ。

○学校は落ち着いた状況である。

○コロナ禍の状況下にあつての行事については工夫をして実施した。

「視点3(進路指導・支援)」:学務キャリア支援グループ 下山田総括教諭より

○大多数は指定校推薦・AOを選択しており、それに対応した指導・支援を行なった。

(具体的には『志望理由書』や模擬面接)

○一般受験は15名程度で「大学入学共通テスト」は30名程度が受験している。なかには推薦で進路先が決定している者も「大学入学共通テスト」に臨んだ。

「視点4(地域等との協働)」:学務キャリア支援グループ 下山田総括教諭より

生徒支援グループ 万行総括教諭より

○「総合的な探究の時間」の取組は、進路がメインであったが、平和学習、租税教室、沖縄文化の講演を実施した。

○地域貢献活動は、募金活動、市内小学校での交通安全教室を行なった。

「視点5(学校管理・学校運営)」:総務グループ 澤野総括教諭より

管理職 碓井副校長より

○施設管理、P T A活動、式典、防災を担うグループで、避難訓練・D I G研修は効果があった。現在は完校に向けてのかたづけに取り組んでいる。

○トイレ清掃については外部業者委託として好評を得ている。

○働き方改革については、教職員の人数減のなかで分担して対応した。特に部活動はインストラクターを上半期に集中させたスタイルで活用した。

○不祥事防止については、月1回の研修・会議等を通して、適切な対応を行なった。

②質疑応答

「視点4」に関して

●「沖縄文化」の講演は、一般的なものか、それとも東逗子関係のものなのか。

○本校卒業生で教育職の者とのつながりから講演を依頼した。沖縄修学旅行に行かれなかったことを考慮して、沖縄の音楽と舞踊について専門的な内容をうかがった。

③意見交換（視点ごとの学校関係者評価の策定）

「視点4」に関して

●コロナ禍での対応は大変であったことが想像されるが、Z-SELECのボランティア活動では柔軟な対応をとっていただけた。

●逗子高校で築き上げたものは新校へ受け継がれている。その端的な事例が校歌の作成にある。

●新校の校歌の作成については、「ともいくフェスタ」にて動画公開することになっている。「総合的な探究の時間」を新校からでなく、逗葉高校の時点で移行できたのはメリットが大きい。更なる発展を願う。

●逗子高校だけでなく逗葉高校もなくなるという思いも生じた。

④感想

●100周年記念式典の様子から生徒の充実感が伝わってきた。部活動（吹奏楽部）交流は、中学から高校へ向かう意識の高まりを生徒に持たせる取組であった。新校での継続を期待している。

●誰も望んでいないのに、行政の都合での完校となり、寂しい感が拭えない。逗子高校の伝統が新校に引き継がれていくということを考えれば、明るい面も残されている。

●就職面接を通して生徒との関りがあったことから、人間としてのベースラインに寄与することができた。学校側もその点に力を入れていた。人間力を養うための逗子高校としての機能があったと理解している。

●長い歴史をもつ吹奏楽・野球を筆頭に、部活動での活躍が印象に残っている。

●「総合的な探究の時間」でのつながりを通して、教職員は生徒を我が子のように慈しんでいた。「外部に向かって発信できる力をつけさせたい」「社会に出て困らないようにしたい」という思いは、人が変わっても変わることがなかった。この「不変の思い」が取組であり、伝統になった。新校も次の世代を育ててほしい。

●「緩やかな校風」の中で、時代とともに丁寧に対応する教職員の努力に感謝している。

学校の評価は「人を育てること」が基本。数字（偏差値等）に捕らわれてはいけない。新校の志願倍率1.4倍に、新しい学校への魅力が顕れている。逗子・逗葉の互いの歴史を尊重した新校であってほしい。

●自身・子供を介して逗子高校とは長い年月のつながりがある。新しいものを積み重ねるために存在した逗子高校であった。

●コロナ禍に苛まれた1年次・2年次であったが、丁寧な対応をしていただいた。最後の年度となり、在籍する生徒の人数は少ないが密度の濃い高校生活を送ることが出来た。卒業式当日まで生徒を見守っていただきたい。保護者として見守りたい。

(3) その他

○特になし

(4) 校長より

○『広報ずし』での逗子高校完校の特集

○逗葉高校會田校長の思いは「新校は逗子・逗葉の両校の良いところを受け継ぐ」

○『埋木』掲載の村松校長の「巻頭言」の紹介

○学校運営協議委員の皆様への御礼